慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ローゼンベルグ経済学史 附、リヤシチエンコ経済学史
Sub Title	
Author	浜田, 恒一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.11 (1935. 11) ,p.1747(143)- 1755(151)
JaLC DOI	10.14991/001.19351101-0143
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19351101-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ローゼンベルグ經濟學史

附、リャシチェンコ經濟學史

濱田恒一

吾々がソ聯經濟學者の學說史に期待する處は、精緻なる考證と周密なる詮索とではない。それ等は所謂「ブルジョア」經濟學史家の側に於て、多くの收穫を、吾々は有してゐる。吾等が彼等に求むるものは、方法論的に行塞つた經濟學史に、新興國の持つ新らしい生命を吹込んで呉れることである。從つて、私は先づ「方法論」を問題とする。

經濟學史の對象は何か。それが經濟學であることは言を俟たぬが、周知の如くマルキストの見解に依れば、經濟學には廣狹の二義がある。狹義のそれは、資本主義的社會構成の特殊な發展法則を研究するものであり、廣義のそれは、資本主義的社會構成以外の社會經濟的構成の夫々に特殊なる法則を研究する。經濟學史の對象たる經濟學は各れであるか。リャシチェンコもローゼンベルグも、狹義の經濟學だと考へてゐる。その理由はリャシチェンコに從へば、經濟學が特殊な理論科學となつたのが第十八世紀初頭だからである。ローゼは別に理由を述べてゐない。一つの學の對象を規定する理由を述べないことは、甚だしき杜撰であると言はねばならぬ。而して經濟學史の對象をかくの如くに規定する結果、當然經濟學說史は資本主義の終焉と共に終焉すべきもので、リャシチェンコは之を明

言してゐる。ローゼは矢張り沈默してゐる。

而してローゼに依れば「狹義の經濟學は資本主義的生産樣式と共に、その實在的諸矛盾及び階級鬪爭の發展と平行して、生起し發展する一の過程として、その發展に於て考へられたる經濟學は、ブルジョア經濟の發展と共に發展する。經濟學思想界に於ける諸種の潮流・方向・學派の爭ひは、諸階級の鬪爭の一形態であり、經濟的政治的諸戰線に於ける鬪爭と一態を爲してゐる。そして正にかゝる姿に於ける經濟學こそが、經濟學史の對象となる」のである。この言葉の中で注目すべきは、經濟學を過程として、發展に於て考へるといふことである「凡て理論は既成の結果として現れ、その理論の發生と逐次的發展とは、理論それ自身の裡には與へられて居らない。然るにこの過程の闡明こそが、經濟學史の研究對象なのである」これは今更說明するまでも無く、ものゝ本質をその運動に於て把握するといふ辯證法の考へ方に一致する。そして經濟學の運動は現實的には、階級鬪爭の一形態として現れる。一層明白に言へば「經濟學は階級諸關係の表現並びに階級鬪爭の手段」として現れるのである。所がリャシチェンコは些か之と異り、經濟學の理想といふ觀念を持出す。曰く「經濟學の主要な窮極的な理想は、社會經濟問題とその解決である。だからその歷史は社會經濟問題解決の思想史となる」と。こゝに云ふ社會問題とは何であるか。リャシチェンコに從へば、社會問題の本質は結局諸階級の經濟鬪爭に在るのである。この鬪爭は大體に於て、經濟的に抑壓された社會群の、その抑壓者に對する鬪爭として、あらゆる時代に現れてゐる。だが社會が分化し、その階級構成が强化されると共に、この鬪爭は純階級的性質を帶びてくる。さうしてあれこれの階級が提唱し實現しやうと努力する利益（夫々の階級自身の）に依據して、一定の社會的イデオロギーが形成され、社會問題解決の豫圖が作り出され、時代精神に從つて一定の社會諸關係が成熟し、作り出される」と。こゝに至つて、私は些か嘔然たらざるを得ない。

引用句の○點は私が附したのであるが、一體時代精神とは何であるか。時代精神は人魂の樣に空中に遊離してはゐない。必ず何人かの精神であり、その精神の所有者は、何等かの階級に屬してゐる。時代精神とは結局する處何等かの階級の精神に他ならない。之を時代精神と呼ぶことは、甚だしい誤魔化しである。況んやそれに從つて、一定の社會諸關係が成熟し作り出されるといふが如きは、左翼の常套語を藉りて云へば、マルクスの甚だしい歪曲である。階級鬪爭を表現するに「社會問題の解決」といふ言葉を用ゐたり、政治鬪爭に一言も觸れなかつたり、このマルキストには、どうも怪しい節々が多い。

次に經濟學史の任務は如何

リャシチェンコは言ふのに「經濟學說史は吾々にとつて自己目的ではあり得ない。それは單に經濟理論を理解する爲めの手段でなければならない。經濟學史は經濟學の基本問題を解決する歷史的手段であり、一般的社會經濟的認識及び世界觀を完成する爲めの手段である」と。世界觀を完成する爲めの手段といふことを言ふならば、それは惟り經濟學史だけではないから、之を除けば、經濟學史プロパーの任務は經濟學の基本問題を解決する歷史的手段たることである。この外に「一般社會經濟的認識を完成する手段云々」があるが、これは經濟學の基本問題を解決すれば自ら生ずるのであるから、とゞのつまりは「經濟學の基本問題を理解する歷史的手段たることが、經濟學史の任務だといふことになる。然らば經濟學の基本問題とは何か。それは先に述べた如く、經濟鬪爭としての社會問題である。されば「經濟學史なるものは、階級社會の枠內の一定の經濟的環境のなかで、もしくはそれから出發して、あれこれの時代を支配してゐた一定の階級關係の見地から、社會問題がどういふ風にイデオロギー的に解決されたか、つまりどんな工合にして一定の社會的イデオロギーが形成されたか、そしてそのイデオロギーはその發生の源を社

會のどんな物質的經濟的存在諸條件のうちに持つてをり、見出してゐるかを研究するのである」と。結局、經濟思想がどんな物質的存在條件から生れたを知ることが、經濟思想史の任務だといふのである。經濟思想が物質的存在條件の所產だといふことは正しい。併しそれだけでは不充分だ。經濟思想は更に物質的存在條件に働きかけるのである。少くとも、マルキストならば、之を言はねばならない筈であらう。

右に對し、ローゼの主張に依れば、科學の歷史は科學發展の合則性を闡明せねばならぬと。從來の所謂「ブルジョア」經濟學史に於ける最も根本的な欠陷は、實に之が無いといふことである。彼等と雖も經濟思想とその背後なる經濟生活並びに政治其他とが、特に經濟生活とが、深い關係を有することは認めてゐる。併しその認め方は頗る漠然として居て、科學的分析と稱するに足らない、ローゼの語を藉りて言へば、經濟を少々、政治を少々、哲學を少々等々を寄集めてこしらへた「雜炊的概觀」に依つて、時代を特色付けてゐるに過ぎない。斯樣な「雜炊的概觀」の中で、最も頻繁に語られることは、時代「精神」であると。

然らば經濟學發展の合則性は如何。これは彼がマルキストたる限り、改めて聞く迄もあるまい。曰く「社會的存在の發展が社會意識―階級的社會に於ては、それは階級意識である―の發展を規定する。かゝる階級意識の諸形態の一つが經濟科學であり、その發展は現實生活の發展の結果である」と。又、マルクスを引用して曰く「工藝なるものは、自然と人類の能動的關係・人類生活の直接的生產過程、隨つて人類の社會的生活諸關係及びそれから知的諸觀念の直接的生產過程である。かゝる物質的な基礎から抽象される時は、宗教史でさへも無批判的なものとなる」と。かゝる立場の當然の結果として「より發展せざる理論からより發展したる理論への推移が、恰も思考自體の自己運動であるかの如き幻想に陷つてはならぬ」との主張が生れてくる。

方法論に關する敍述はこれに止めて、進んで兩者の經濟學史の內容に觸れよう。尤も、リャシチェンコの譯は全卷であり、（重商主義から社會主義まで）ローゼのそれは第一卷（重商主義からリカアドオまで）のみであるから、比較の便宜上、リカアドオ迄を論評しよう。

先づ重商主義に就いてみるに、リャシチェンコはその時代的背景を、ローゼの所謂「雜炊的」に概觀したる後、「商業は國民の富及び福祉の基本的源泉であり、しかも貨幣はこの福祉を表現する爲めの基本的形態である――かくの如きが、此の時代に於ける商業資本の經濟的支配のイデオロギー的反映であつた」と。これは正しい。然らばかゝるイデオロギーは「その發生の源を、社會のどんな物質的經濟的存在諸條件の裡に持つて居るか」長文に涉るから引用を避けるが、その說明は、たゞかゝるイデオロギー發生の事實過程を、平面的に敍述したに過ぎない。一例を擧げれば「商業資本が現れて、次第に益、大きい社會的意義を持つ樣になつたかは、全然說かれてゐない。進んで商業資本の發展過程と重商主義イデオロギーの發展過程との內的關聯は全く說明されてゐない。そして結局は W. S. Gentteman と Thomas Man の所說の概略を記述するといふ舊套に墮してゐる。

翻つてローゼをみるに、重商主義を規定して「重商主義は商業資本イデオロギーである。然しこの商業資本たるや、商業資本一般ではなく、產業資本に先行せる特定の時代の商業資本である」と。結局は同じことを言つてゐるにしても、ローゼの方が遙に明確である。次いで、先づ「資本主義的生產の前史」としての商業資本の理論的分析を行つて、資本が生產そのものを從屬せしむるに到つた遙か以前に、何故に商人資本が資本の歷史的形態として現れ

たかを說明し、進んで商業資本の時代の經濟的並びに社會—政治的構造を論じて、貨幣が全經濟政策に對して、大いなる威力を振ふに到つた所以を明にしてゐる。然る後實踐として、及び理論としての重商主義を別個に取扱ひ、重商主義に關する限り、經濟政策が經濟學に先行したと主張してゐる。理論としての重商主義は、近世的生產樣式の理論的取扱ひの最初のものであるが、併しそれは商業資本の運動として獨立化されたる、流通過程上の皮相たる諸現象から出發し、從つて現象の外觀だけを把握したに過ぎなかつたと論評してゐる。洵に『商業資本の時代が資本主義的生產樣式の「前史」であると等しく、重商主義體系は經濟學の「前史」なのである』と。ローザが例として擧げる重商主義者は、リャシチェンコと同じく W. S. Gentleman と Thomas Man である。

而して經濟學が科學となつたのは、第一に、研究が流通部面から生產部面へ移行し、第二に、勞働價値論が樹立され始めた時からである。第二の端緒を開いた者がペーティであり、第一を行つたものが重農主義者であるといふ。

併しその前に重商主義の解體に就いて一言せねばならぬ。こゝでウィリアム・ペーティが登場する。

ローゼはマルクスに追隨して、ペーティを近世經濟學の始祖となすが、同時に彼を以て、凡ゆる問題を商業と貨殖の見地から扱ふ重商主義者と看做してゐる。併し、例へば貨幣の問題に關する場合の如く、彼の重商主義には反重商主義的見解が含まれてゐる。これは轉換期に在つた當時の英國の經濟事情に依つて說明される「舊式の商人及び高利貸は未だ舞臺から退かず、他方、新しい型の商人及び產業（彼等の富は大マニュファクチュア又は大土地所有に依つて形成されてゐる）が出現してゐた。かゝる時代に於て、貨幣を富の唯一の形態と看做す考へ方が、貨幣を流通及び富の手段とのみ看做す考へ方と、交錯してゐるのは異とするに足りない」と。

之に反し、リャシチェンコは、マルクスが認めて近世經濟學の始祖と做した人に就いて、一言も記述してゐない。

重商主義の公然たる批評家として、ローゼ及びリャシチェンコはノースとヒュームを擧げてゐる。スチュアートは經濟政策として尙頑强に存續せる重商主義を、理論的に再現せんとするを任務となしたと說かれてある。

轉じて重農主義をみるに、ローゼに從へば、それは資本主義の發展、商業資本より產業資本主義への覇權（ヘゲモニー）の移動につれて、從つて又經濟思想自體の發展につれて、漸次に準備されていつたのである。農業に於ける資本主義は封建制度の下に發達し始めたが、併し資本主義は封建的土地所有を、資本主義的土地所有に、地代に於て實現される土地所有にと轉化させ始めたのである。これは經濟學者達に農業の發展を通じて資本主義を發展せしめるといふ方法を示唆したのである。重農主義は封建社會からのブルジョア社會の分化の、全世界的歷史過程のフランス的表現なのであると。

重農主義に對するリャシチェンコの特徵付けは甚だ曖昧である。三六頁では「支配的な、併し既に時代錯誤の社會經濟的階級が、自分の利益のイデオロギー的基礎付けの試みをやり、それを新しい法律的經濟的生活條件に調和しやうとしたのである」と言ひ、五四頁に於ては「重農主義は封建社會の枠內で擡頭し始めたばかりの工業資本主義の體系に屬してゐる」と述べてゐる。その二つの言葉は、夫々間違ひでは無い、重農主義の夫々の發展段階に就いては概ね正しいが、重農主義全般に適用され得ないのである。急調に在る過度期の思想を、一括的に、公式的に處理しやうとした處に、リャシチェンコの曖昧が生じたのである。

次いでスミス及びリカアドオ研究に入る。ローゼはスミス研究に百四十頁、リカアドオに百二十頁を費してゐる。されば余に殘されたる數百字では、彼が所說の一斑をさへも表現し難い。

ローゼはスミスの歷史的背景を規定して、スミスは工場制手工業の時代から機械生產に移る時代のイギリス經濟

學者であるといふ。これは洵に平凡な規定であるが、從つて亦異論の餘地もない。この規定の故に、ローゼは先づ工場制手工業の特色如何を明にし、次いでこれが如何樣にして機械生産時代の到來を用意したか、而してこの過程がイギリスでは如何なるものであつたかを論述し、次いでスミスの略傳を記したる後、スミス學說の分析に入つてゐる。

ローゼに依れば、一見する處、經濟的知識の百科辭典の如き觀ある國富論は、（一）全卷の對象が諸國民の富であること、（二）經濟的自由の思想が全卷を貫いてゐることの二つに依つて、その各編が內的關聯を有してゐる。分業及び資本を論じてゐる第一、第二編は云ふまでも無いが、經濟史及び經濟學史を論じてゐる第三編、第四編と雖も、スミスの興味は經濟史や經濟學史ではない、分業が――都市と農村との間の分業として――一定の歷史的時代に於て如何に發展したか、又、政策の當否が如何に之を促進又は阻碍したかゞ第三編の主題であり、如何に誤れる政策が、特に重商主義が、分業の自由なる發展を妨げたかを示すのが第四編の主題である。即ち、第一第二編は富の積極的原因を、第三、第四は消極的原因を研究したのである。第五編も、國家の收入・支出及び債務を、國家發達の見地から觀察してゐるのであると。

第二の自由思想に就いて云へば、固よりこれはスミスの發明ではないが、而も彼が功績は、（一）この思想に理論的基礎を與へ（二）この思想を歷史的研究及び彼以前の學說批判の基礎とし（三）この思想の上に財政の理論と經濟政策とを確立した點に存するとローゼは主張する（個々の經濟理論の論述は一切省略し、リカアドオに移る）。

ローゼに從へば、リカアドオは古典經濟學の完成者である。各所に於て、ローゼは之を示しつゝ、鋭く論難してゐるが、餘白の都合上、代表的なものとして方法論を例に採り、ローゼの筆法を示さう。彼は云ふのに、リカアドオに生産關係と生産力との統一及び兩者の矛盾の思想が缺けてゐる。第二に、ブルジョア體制の發展に伴ひ、生産諸關係が修正され複雜化するに過程、從つてまた生産諸關係を表現する諸範疇が修正され複雜化する過程が視野に上らなかつた。從つて最も單純な範疇から一層複雜な範疇に上向することを知らず、その結果、例へば利潤と剩餘價値との直接的一致を認めた。第三にリカアドオの全分析は、根本に於て、質的性質ではなく量的性質を帶びてゐた。價値・勞賃・利潤・地代は一定の大きさとして彼の興味を惹いてゐると。

要するに、ローゼの學說史は、その說の當否を別としても、自己の抱懷する經濟理論に就いて確固たる所信を有するものにのみ許されたる、明快なる分析と批判とを示して居り、經濟學史研究に於ける近來の貢獻と云ふべく、リャシチンコのそれと比すべくも無い。左翼と左翼的との差であらう。譯文亦概ね明快である。